能登・未来を探る

＜下＞

逆境での経験、武器に

サービス・素材 世界に通用

老舗旅館の加賀屋（石川県七尾市）に海外の企業が熱い視線を送っている。中国や東南アジアのほか、ブルガリアなど欧州からも声がかかる。出迎えから見送りまで、きめ細かく顧客に寄り添う日本流の接客に興味を抱いた現地の同業者から「運営手法を供与してほしい、と頼まれる」（神前裕常務）。

2010年、加賀屋は台湾で「日勝生加賀屋」を開業、初めて海外に出た。資本は現地企業が大半を握るが、日本の加賀屋と同じ企業が建設を手掛けた。食材の一部は能登から送っている。客室係の女性70人はすべて日本語検定の有資格者。「日本流のサービスは日本語で指導した方がいい」（同）との判断だ。

加賀屋は創業107年目を迎えた。小田禎彦会長は「なかなか来てもらえない『へき地』にいることをバネにサービスを磨いてきた」と話す。現在は石川県内の5社と日本旅館の海外展開に向けたプロジェクトも進める。経済産業省の「クール・ジャパン戦略推進事業」の指定も受けた。能登発のサービスが世界に広がろうとしている。

気候、交通の便、消費の規模――。能登はいずれにも恵まれていない。しかし、不利な環境下で知恵を絞った企業が、世界に通用するサービスや商品を生み出している。

高級服地の見本市として有名な仏パリの「プルミエール・ビジョン」。

加賀屋は台湾でも日本と同じサービスでもてなす（台湾の日勝生加賀屋）

2月の開催時、天池合繊（同県七尾市）の「天女の羽衣」は、優れた素材だけが展示を認められる特設会場にも並んだ。

毛髪の5分の1から6分の1という極細の繊維。染色も自前で手掛け、独特の光沢を放つ。海外では高級ドレス、国内では首に巻くストールで採用されている。

丸井織物（同県中能登町）は欧州のスポーツウエア市場で名が通る。吸汗性や速乾性に優れる高密度織物などで4万種以上のサンプルを持ち、デザイナーに提案する。スポーツウエア生地の生産では国内最大規模だ。

能登では冬場に機織りで生計を立てた農家が多く、戦前から繊維業が集積した。円高不況など苦難の時代を経て、したたかに生き残った企業も多い。能登のメーカーとの取引が多い、のと共栄信用金庫の大林重治理事長は「チャレンジ精神を持った企業が、高付加価値品や多角化に活路を見いだした」と話す。

練り製品のスギヨ（同県七尾市）が4月、10億円を投じて完成させた北陸冷凍工場（同）。内部の研究拠点では次世代商品の開発が進む。食材の機能性を生かして体に塗る商品ができないか、など奇抜な研究もある。

同社は40年前、カニ風味かまぼこ（カニガマ）を最初に発売した。「身近な1次産品を活用し、ニッチな市場を作り上げる」（杉野哲也社長）スタイルで成長してきた。

低カロリー志向が強まる米国ではカニカマを現地生産し、年間10億円程度を稼ぐ。今後は「東南アジアへの進出を検討する」（同）という。

高齢化や人口減といったハンディと早くから直面してきた能登の企業。独自のノウハウや技術を武器に世界へ挑む姿勢が、能登の経済を活性化する原動力になる。

国司田拓児、斎藤公也が担当しました。